

つまり、宗教は人間を高め、強くするものでもある、とニーチェは考えている。ニーチェにおいては、人間の類型を高めるために、換言すれば「人間の自己超克」のために、哲学者が新たな価値の創造・あらゆる価値の再「価値転換」という課題を担う。このような哲学者は未だ不可能であり、「未来の哲学者」である。「未来の哲学者」が生まれるために、禁欲的「克己」による「人間の自己超克」が行われなければならない。では「人間の自己超克」のために宗教的禁欲・「克己」が役立つとはどういうことだろうか。

ニーチェは宗教的禁欲・「克己」における「疾しい良心」の否定的働きに、「自己超克」という運動の原理を見出している。「自己超克」という運動は、まず、科学による宗教の反駁において見出される。疑わしいものによって「真理」への欲求を満たすことを科学に厳しく禁ずる「誠実さ」は、キリスト教道徳の「誠実さ」に由来する、とニーチェは考える(『道徳の系譜学』第三論文二十七節)。ただし、科学的「誠実さ」は宗教に由来しつつも、それを否定し超え出ている。なぜならば、自己に対する否定がメタ化されているからである。このメタ化の働きは「誠実さ」のうちに含まれている。「誠実」であろうとすれば、「自己自身が本当に「誠実」であるのか否かが良心に厳しく問われる。この自己言及作用に基づくならば、科学の「誠実さ」もまた否定され「自己超克」が起こらねばならない。そして、「疾しい良心」の自己言及的な否定性による科学の「自己超克」のプロセスこそが、哲学者の「教育」である。

本発表は、哲学者の「教育」の手段としての宗教という議論

に注目し、ニーチェの宗教に対する肯定的側面を明らかにすることを試みた。ニーチェ哲学の宗教に対する肯定と否定という両義性は、自己否定の持つ両義性である。宗教は否定の形式を提供するという形で「人間の自己超克」に寄与し得るのである。ニーチェによれば、生否定を強化するべきではなく、生を否定する自己を否定し、自己否定を強化しメタ化しなければならない。

前期ヤスパースにおける

信仰と信仰の交わりの問題

藤田 俊輔

ヤスパースは、宗教だけでなく哲学の立場をも信仰であるとする独特の立場を打ち出した思想家であった。こうした彼の立場を最も明確に表しているのが、「哲学的信仰」という術語である。哲学的信仰は『理性と実存』(一九三五年)以降の後期ヤスパース哲学を特徴づける重要な概念であり、またこうした哲学的信仰の立場から、宗教的信仰との交わりも積極的に試みられるようになる。しかし、こうした哲学的信仰の萌芽はすでに前期の名著『哲学』(一九三二年)において認められるものであり、そこでは信仰は実存に固有の「絶対意識 (Absolutes Bewußtsein)」の充実態として、愛や想像力と並んで取り扱われている。絶対意識とは、ヤスパースによれば「実存の存在確信」に他ならず、体験としての意識ならびに意識一般といっ

た内在的な意識とは区別された超越的な意識である。本発表では、このような絶対意識の充実態の一つである信仰の立場に注目し、そうした信仰と信仰の交わりの問題がどのようなものとして考えられているのかを明らかにしたい。

考察の手順としては、まずこうした絶対意識の充実態の一つである信仰がどのようなものとして考えられているのかを明らかにし、そこからこうした信仰が他の信仰との交わりに対して開かれた性格を持つものであることを提示する。そして次に、ヤスパースが絶対意識論とは別の箇所語っている「信仰と信仰の対立」という問題について触れ、こうした信仰と信仰の対立がその内容からして「信仰と信仰の交わり」として理解可能であることを提示する。最後に、このような信仰と信仰の交わりが、ヤスパース哲学の根本概念である実存的交わりとしての「愛の闘争 (liebender Kampf)」と同じ性格を持つことを指摘し、信仰と信仰の交わりがその内容から見て実存的交わりとしての愛の闘争の問題領域に引き入れられるものであることを明らかにする。

以上のような諸考察を経て、前期ヤスパースにおける信仰と信仰の交わりの問題がどのようなものとして考えられているのかが明らかになるとともに、またそこに後期ヤスパースの宗教哲学的な思索の萌芽も同時に見て取られることになるであろう。実際に、哲学と宗教の問題に関するヤスパースの思索は、後期の著作『啓示に面しての哲学的信仰』(一九六二年)において頂点に達し、そこでは両者の信仰が互いに出会い得る可能性が探求されているが、こうしたヤスパースの思索の姿勢は本

発表で問題にしている信仰と信仰の交わりという、前期における思索から一貫したものであったのである。

ヤスパースとブルトマン

岡田 聡

ブルトマンがはじめて「非神話化」を提唱したのは、一九四一年の講演、「啓示と救済の出来事」においてである。そしてそれは同年、論文「新約聖書と神話論」として発表された。非神話化は戦後、哲学者によっても取り上げられるにいたった。その代表的なものが、ブルトマンとの論争の発端となった、ヤスパースの一九五三年の講演、「ブルトマンの非神話化の真理と災い」である。ヤスパースは、ブルトマンの非神話化のどこに、災いを見出すのか。本発表は、両者の「啓示」をめぐる議論を手がかりとして、それを明らかにする。

ヤスパースによれば、自らとブルトマンを分けるのは、啓示思想への立場である。ヤスパースは啓示思想を批判して、次のように述べる。「神が、ある処である時に、一回限りあるいは一連の行為によって、自らを局在化した」ということは、世界の中で神を客観的なものへ固定化してしまう信仰である。」

ブルトマンはその批判に対して「まったくそのとおりだ」と答えたうえで、次のように述べる。「ヤスパースは、私がまさにそうした神の客観的なものへの固定化に対して闘ったということを知らないのか。」